

Title	＜翻訳＞モールドンの戦い：古英詩試訳
Author(s)	金山, 崇
Citation	大阪外国語大学学報. 29 p.179-p.189
Issue Date	1973-02-28
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80469">https://hdl.handle.net/11094/80469</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## モールドンの戦い ―古英詩試訳

金 山 崇

This is an attempt at translation into Japanese of The Battle of Maldon, a celebrated heroic poem written mainly in the late West Saxon dialect of the eleventh century, whose complete translation has not to my knowledge appeared in this country.

The present rendition has been based largely on E. V. Gordon's edition in Methuen's Old English Library. Other editions of the text, translations and books on literary and historical backgrounds that have proved helpful have been mentioned in the bibliography.

・・・の破らるる・・・

そこで下知あり、若武者共一人残らず馬の轡解き放ち、

遠くへ追遣り、進み出でよ、

勲建つこと専一に、只管勇猛心奮え、と申された。

オッフアが縁者、殿には

( 5 )

怯懦を赦し給わずと知るや、

己が掌より秘蔵の鷹をば

彼の森に向いて放ち、その闘いへと歩武を進めた。

これ、彼の若者、弓矢把り戦に臨めば、

弱き心を起こさざる証とぞ受け取れた。

( 10 )

彼に続くはエアドリーチ、戦の庭にて

君に、主公の御為に、尽さんとの志あり、重槍搔込み

敵に迫らんと出で立った。彼、楯に広身の劔

掌に握る力残れる限り、不屈の心、失わなかった。

召されて主公の馬前に戦うべき時至りて、

( 15 )

かねての忠誠の誓い、果たすのであった。

さて、ビュルフトノース、其の場の陣備えに掛かり、

騎馬のままにて指図して、軍兵共に

持場を示し、それを守り抜く術教え、

更に又、法に違わず楯しっかりと握りしめよ、

( 20 )

夢懼るるな、と励まされた。

軍勢を然るべく布陣し終えて殿、

馬より下りて部下が内、己が意に一番適う者共に、  
杖とも頼む柱成す家臣共が処に身を寄せられた。

さてその時、向岸に立ち大音声に呼ばわったは  
バイキングが使者、物申し、  
岸に立てるまま、居丈高に、  
大浪越ゆる旅武者共が伝命、披露した。

「某は勇武なる海の武者達に遣わされ  
貴下に口上を命ぜられし者、速やかに  
宝環を献じ、身の安穩計らるるがよし。」

抑、汝等貢物を献じ、以てこの重槍の葛藤避くるが  
我等かかる苛烈なる襲撃に加わるより得策。  
汝等に調達の力あらば、我等互いに命失うこと無し。  
我等、黄金と換えて戦を止むる所存。

此の地治むる貴下にして、貴下が民をば救命し、  
海の武者達が望むに任せ財渡し、  
友誼を得、我等より  
安泰を購うべしと覚悟召されば、  
我等、宝を持ちて舟に立ち返り、  
海原に出て、汝等脅かす事無し。」

ビュルフトノース、これに応酬し、楯差し挙げ、  
とねりこの細槍振るい、物申して、  
怒り激しく、決然と、使者に返答した。  
「海行く人よ、こなたの兵共の声聞こゆるや。」

貢物欲しくばこれ共は、重槍を、  
必殺の穂先を、又年経し名刀を、  
闘う汝等に益為さぬ決死の覚悟の武器をば  
献ぜん。大浪越ゆる者共の使者よ、立ち返り、  
いやまさる憎き返答を、汝の国の民共に伝えよ。

此の地には、軍勢従え、物に動ぜぬ大守あり、  
此の国土、我が国王アゼルレードが祖国、  
その民、その領土をば護る覚悟なり、と。  
夷狄は闘いに斃るること必定。斯く深く、  
我等が祖国侵しつつ、一戦交えず、

我等より宝を受ければそれを持ち、  
舟に引き返すは余りに  
名折の所業と我には思わる。

汝等にかく易々と宝は渡さじ。

我等、貢物差し出すよりは、穂先と刃、  
峻烈なる白兵戦に雌雄を決せしむる覚悟。」 ( 60)

言い終りて殿、軍兵共に下知あり、楯を構えて  
前進し、打ち揃い岸边に陣取れと申された。  
岸边には、河を挟んで両軍、相寄れず対峙した。  
退きいたる潮、滔滔と満ち来り、  
二つの流、相結ばれた。両軍共に槍合わす  
折来たるを千秋の思いで待ち侘びた。

( 65)

そこパンテの流れ挟み勢揃いしたは  
東サクソン人が備えと、とねりこ舟の夷狄軍、  
飛び来る矢玉に命果つるは別きて、  
互いに殺傷する事些も能わず。

( 70)

潮は退きぬ。海の男共、  
戦いに飢えし数多のバイキング、時遅しと身構う。  
この時、橋抜かるるな、と武者達が護り主、  
下知されたは、武門の誉高き一族の出、  
勇猛の士にしてその名はウールフスターン、これは  
チェーオラが息子にて、彼先陣切って橋渡り来ると豪の敵武者、  
フランク族が槍を投げ、屠った。ウールフスターンが傍に、  
恐れを知らぬ戦士達、アルフェレ、マックスの二人意気旺ん、  
此の渡しより怖れ退かず、  
仇為す敵を向こうに廻し、その掌に弓矢  
握る力残れる限り、持場譲らず決然と、戦った。

( 75)

橋の守りの激しく抜き難きを見、  
まざまざと悟りたる敵、  
憎むべき夷狄の者共、謀りて、  
こなたの岸に上げさせ給え、  
浅瀬の渡し越え、兵率いさせ給えと乞うた。

(85)

これに应えて殿、余りの高き矜持故、  
憎き敵勢に、口惜し、余りに多き足掛りを宥された。  
さてビュルフトエルムが御子、冷たき河面の彼方に向い  
呼びかけられた。兵共は聞き入った。  
「汝等の為、場所は明けたぞ。疾く来り

( 90)

我等と矛を交えよ。屍伏す野を何れがかち取るや、  
神の御心にのみあり。」 ( 95)

血に飢えたる狼共、バイキングが軍勢、  
流れ物ともせず進み來たる。パンテの流れ西に越え、  
輝き互る水分けて、楯運んだ、  
舟武者共、しなの木の楯ひっさげ陸へと渡った。  
敵が行手にビュルフトノース、軍兵率い (100)

待ち設けた。軍勢に下知し、楯以て  
楯襖為し、仇なる敵を向こうに廻し  
しっかりと耐えよ、と申された。戦いの時、  
合戦の栄光の時、が近付いた。命運尽きて  
人斃る時が来ていた。 (105)

喚声が起こった。渡り鴉天に舞い、  
鶯は死肉を焦がれた。大地はどよめいた。  
軍兵共、掌より鎚の如く硬き槍、  
研ぎ澄ませたる必殺の重槍、飛ばせた。  
弓せわしく鳴り、楯、穂先をがっしと受け止めた。 (110)

白兵戦の様凄じく、両軍の兵士共  
斃れ伏し、若武者共地に仆れた。  
ビュルフトノースが血縁ウールフマール、  
傷つき、屍のうちに伏した。殿が姉妹の御子、  
痛ましく数多の刃傷蒙け斃れた。 (115)

其の場移さず、バイキング共に返報が為された。  
聞く処、エーアドウェアルド、情容赦もあらばこそ、  
己が劔もて敵の一人、ずんぐと切り下げれば、  
命運尽きたるその武者、彼が足許に仆れた。  
主君、この行いを嘉し給い、のち (120)

折見てかの待臣に礼を述べられしとか。  
斯くの如く、堅き心の若武者達、  
合戦に持場譲らず、弓矢持てる彼等武者共、  
命運尽きたる敵兵が命、何れが先に  
穂先もて奪い得るや、と必死に勤めた。 (125)

命奪われし者地に斃れた。  
武者共屈せずその場を守り、ビュルフトノース彼等を励まして、  
デネ人と戦い名を挙げたき若武者共、一人残らず  
堅き覚悟もて戦え、と鼓舞された。

さて、莽猛なる武者、進み出で、 (130)

武器差し挙げ、楯構え、殿を目指し歩み寄った。

負けじと殿も決然と、件の輩に向かわれた。

両者互いに仇為さんと懸命に機を窺った。

その時彼の軍兵、南国渡来の重槍飛ばせば、

武者達が主公、ために傷つかれた。 (135)

殿屈せず楯の縁もて押し払えば、槍の柄折れ砕け、

穂先に当て砕けば、弾みて相手に跳ね返った。

百戦のこの勇士、烈火の怒りもて、己れに傷負わせたる

驕慢のバイキングを、重槍もて刺し貫いた。

彼の武者は老練であった。フランク族が槍用い、 (140)

此の若武者の首突き通し、手練の業にて

慮外の敵が急所、深く貫いた。

次いで殿、憩う暇もあらばこそ、返す穂先を

新手の敵目掛けて投げ、貫いた。敵が胴鎧ために裂け、

鎖帷子ものかは、ずんと通って胸間を刳り、心の臓に (145)

必殺の穂は刺さった。殿いよいよ嘈々と、

豪胆の人高笑いし、主の神に、天帝に、

与え賜いし今日の業を謝された。

さて、奸賊共の一人、手より握れる

投槍飛ばしたれば、誤たず (150)

アゼルレードが高邁の臣をば貫いた。

殿の傍に居りしは、元服前か一人の若武者、

うら若きこの武者、げに大胆に

君の軀より、朱に染まりし重槍をぐいと引き抜いた。

これはウールフスターンが子、ウールフマールの若殿にて、 (155)

いと堅きその槍、敵に報いた。

穂先はずんと喰入って、痛き槍傷

彼が主公に負わせし者、大地に仆れた。

その時、殿を目掛けて進み来る兵士あり、

宝物を、身に付けたる軍装を、美々しく飾れる宝劔を、 (160)

殿より奪わんとの心であった。

そこでデュルフトノース、広身の刃

一閃抜き放ち、彼の男が胴鎧目掛け斬りつけた。

それより早く一人の舟武者、殿の腕に打ち掛かり、  
無念、刃持つ手を阻んだ。 (165)

黄金造りの柄の劔、その時地に落ち、  
殿は堅き劔握り、弓矢持つこと能わずなった。  
これに屈せず、物申し、  
皎髪の武者、若武者共を励まして、  
屈するな、心合わせて進め、と下知された。 (170)  
その時殿、最早や足踏みしめて立つこと能わず。

天に向いて、  
「万軍の主よ、我が世に亨けし  
諸々の喜びを主に謝す。  
乞い願わくば、慈悲深き主よ、 (175)  
今主我が魂に恵み賜わり、我が靈、  
主の御許へ、主の御国へ、  
諸天使の主よ、平穩に旅せんことを許し給え。  
地獄の仇共に我が靈の阻まるること  
無きよう、伏して主に願う。」と。 (180)

さて、異教の奴原、殿を、又  
傍去らずありし二人の勇士を斬り倒した。  
主君の傍にありて、命捧げし  
アルフノースにウールフマール、俱に仆れた。  
さてその場に留まること望まぬ手合い、敵襲に背を向けた。 (185)

オッドの子等、逸早く其の場より遁走した。  
ゴッドリーチ敵前より逃れ、幾度も  
馬賜わりし英邁なる主君を見殺しにした。  
彼、主君の軍馬に跳び乗った、  
理非曲直も弁えず、飾り付けたる馬に。 (190)

続いて、彼が兄弟二人、馬に乗り馳け逃げた。  
ゴッドウイネにゴッドウィー、合戦を厭い  
戦場に背を向け、彼の森目指し、  
彼の隠れ場へと逃げ込み、己が命をば守った。  
又それのみか、嗚呼、これまで殿より賜わりし (195)  
温情数多、早や忘れ果てたと覺しき亡恩の徒、  
見苦しくも多勢、後に続いた。

奇しくもこの日、戦の前、評定為し、  
席上オッフア、殿に申し、

此の席に大言壮語吐く輩も、正念場至れば、  
腰浮かす者多からん、と語りし言葉が的中した。(200)

さて、軍勢が御大将、アゼルレードが重臣、  
斯く斃れ伏した。家臣おしなべて目の当たりに見たるは  
主君倒れたる姿。其の場に居合わす  
誇高き従臣等、敵討たんと進んだ、  
怯懦を知らぬ豪の者等、どっとばかりに突き進んだ。  
命抛つか、亡君の仇討つか、  
彼等おしなべてふたつにひとつを望んだ。(205)

アルフリーチが子、彼等に進撃せよと叱咤し、  
うら若きこの武者アルフウイネ、物申し、  
その時弁じた。勇ましき言葉で、  
「思い起こせ、我等が酒宴で語りし言辭を、  
大広間で、宴席で、我等武者、  
苦しき戦を語り、酣呼して誓いし時の。  
今こそ勇氣ある者、その証見せる時ぞ。(210)

我が系譜、面々に知らせ度し。  
マーシャの国なる由緒ある家門の出にして、  
我が祖父の名はエアルヘルム、  
此の世の幸享けし君公であった。  
主君、敵の刃に無残に斃れし今、  
この軍勢を脱け、故郷へ帰る心あり、として  
我を責むる家臣達その民がうちにあるべからず。  
殿が死は、我が無上の悲しみ、  
殿は我が血筋にして、我が主君でもあった。」と。  
言い終るや彼、主君の怨晴らさんと、突き進み、  
天晴れ敵中に海の男一人穂先で刺したれば、  
男、彼が武器に命奪われ、大地に仆れた。  
彼次いで、同志、友、同輩を  
励まし、彼等は撃って出た。(215)

オッフア物申し、とねりこの槍振るいて、  
「や、これはアルフウイネ、家臣共皆を  
励まし呉れて、誠に有難し。  
我等が主君、殿、地に斃られたる今、  
弓矢を、堅き劔を、重槍を、愛劔を、  
励まし、彼等は撃って出た。(220)

オッフア物申し、とねりこの槍振るいて、  
「や、これはアルフウイネ、家臣共皆を  
励まし呉れて、誠に有難し。  
我等が主君、殿、地に斃られたる今、  
弓矢を、堅き劔を、重槍を、愛劔を、  
励まし、彼等は撃って出た。(225)



その掌に握る力の残れる限り、 (235)

我等武者、一人一人が互いに励まし、

戦うことこそ、我等すべてに肝要の事。

オッドが腰抜け息子ゴッドリーチが所業に、我等皆欺かれたるなり。

彼が馬に、彼の美々しき軍馬に乗りし折、

殿と思い違えし者夥し。 (240)

ために、ここ戦場に居し軍勢が備え崩れ、

楯襖破られたり。斯くも数多の軍兵を

ここにて逃走せしめたる彼の男が所業に禍あれ。」と。

レーオフスヌ物申し、しなの木の楯、謾りが楯、

高く差し挙げ、彼オッフェに応えた。 (245)

「誓って申す、此処よりは一歩たりとも

退かず、突き進んで敵中に入り、

慈愛深かりし君の怨晴らさん。

我が庇護者、神去りし今、

仕える主君無く故郷へ戻り、戦に背を向けたり、 (250)

と言いて、ストゥールメレ近在の豪の武者共

我を咎むる謂れ無し。

穂先に、刃に、我が身の始末つけさせん覚悟なり。」と。

彼、怒激しく進み入り、決然と戦い、退くを潔しとせず。

ドゥンネレ、次いで物申し、投槍振った。 (255)

彼一介の農兵、辺りに響く大音にて弁じ、

軍勢一人一人、ビュルフトノースが仇討てと鼓舞した。

「軍勢のうちにて、主君の怨晴らさん者、

些も卑怯なる所業あるべからず、命惜しむべからず。」と。

さて一同突き進み、命ものともせず。 (260)

ここに家臣共、重槍ひっさげし決死の武者共、

苦しき闘いに掛かり、神に祈って、

彼等が慈愛深かりし主君の仇打ち遂げ、

彼等が怨敵倒す力授け給え、と。

人質の者、彼等を援けんと一心不乱。 (265)

彼、ノーサンブリアに勇名馳せし家門の出、

エッデラーフが子、その名はアッシュフェルス。

彼、干戈のうちにても、些も怯まず、

矢放つこと幾十度、

その掌に弓矢握る力残れる限り、 (270)

或る時は楯を貫き、或る時は敵を引き裂き、  
目まぐるしき働きなし、敵に傷を与えた。

さて長人の名あるエーアドウェアルド、尚も最前線に踏み留まり、  
しきりに敵を求めた。君公斃られたからには、  
一步たりとも此の場退かず、敵に譲らず、  
と豪語した。 (275)

彼、楯襖を突き破り、敵兵と渡り合い、  
海の武者共に斬り入りて、恵深かりし主君が仇、  
天晴れ討ち果して、地に仆れた。

これに劣らじ、とひとりの高邁なる家臣、 (280)  
シービュルフトが兄弟アゼリーチは、  
前へ前へと突き進み、敵に譲らず闘った。  
彼のみか又、数多の武者、浮き出しの飾り付きたる楯割りしだき、  
雄々しく防戦に勤めた。

楯の縁は裂け、胴鎧、恐怖の叫びを挙げた。  
其の時、オッフア、合戦のうちに、かの海行く武者に斬りつけ、 (285)  
敵は大地に仆れたるが、ガッドに縁のこの武者、  
又其の場にて打ち仆された。

闘いのうちに、オッフア忽ち斬り斃されたのだ。  
然れどもオッフア、彼が君公に誓いし事を果たした、  
恵深き主公に、かねてより、二人打ち揃い (290)  
御館へ、生きて故郷へ、騎馬にて帰れぬものならば、  
戦の庭に仆れ、屍伏す野に傷つき斃るる道を選ばん、  
と誓いし言葉そのままに。

オッフア、主君の傍に、  
天晴れ家臣にふさわしく、仆れ伏した。  
さて楯は楯を迎えて激突した。大浪越ゆる旅武者共、 (295)  
戦いに怒り狂い、進み來たった。

重槍幾度も、命運尽きたる命の館を貫いた。  
スウルスターンが息子ウィースターン、其の時進み出で  
これらが輩と戈を交えた。ウィーエルムが子の  
屍となりて伏す前に、彼、敵兵迫る中、三人を斃した。 (300)  
火花散る激しき合戦があった。闘う武者共、  
その場を譲らず。戦士共、数多の傷蒙り、  
たまらず斃れ伏した。討たれし者、大地に仆れた。

オーズウォルド、エアドウォルドの両兄弟、  
其の間も絶えず武者共励まし、  
彼等が愛する一族に、  
斯かる存亡の時にありて、耐えよ、不屈の心もて  
弓矢揮え、と鼓舞した。(305)

ビュルフトウォルド、物申し、楯高く差し挙げ、  
君に久しく仕えしこの家臣、とねりこの槍打ち振う。  
彼いと勇ましく武者共を励ました。(310)

「我等が力衰うるにつけ、心愈々堅く、  
勇氣愈々烈しく、意氣益々旺んなるべし。  
我等が主君、英邁なる君、今此処に  
数多の手傷負い、土に塗れて伏したり。(315)

今此の合戦に背を向けん意の者、  
永久に悔恨の臍噬むならん。  
我は年老いたり。此処より去らず  
我が主君が御傍に、斯くも掛替え無き御方の傍に屍と伏す覚悟なり。」と。  
同じく、アゼルガールが子ゴッドリーチ、全軍を戦いへと  
鼓舞した。バイキング共が内へ  
必殺の重槍投げる事幾十度。  
斯く彼、味方の先頭に立ち、刃りを  
雉ぎ倒し、斬りつけ、後、戦場の露と消えた。  
合戦より逃げ出ししかのゴッドリーチとは毫末似ぬ別の人であった。(320)

.....

(後記) この翻訳の動機となったのは、私もその一人である古英語の輪読会であり、ここに紙面を借りて、同学の諸氏に感謝したい。1972年8月29日。

## 文 献

(底本)

E. V. Gordon: The Battle of Maldon, Methuen, 1968

(その他のテキスト)

W. F. Bolton: An Old English Anthology, Edward Arnold, 1965

Bright's Anglo-Saxon Reader revised and enlarged by J. R. Hulbert, Henry Holt & Co., 1935

E. V. K. Dobbie: The Anglo-Saxon Minor Poems, Columbia UP, 1958

R. Fowler: Old English Verse and Prose, Routledge & Kegan Paul, 1966

F. P. Magoun, Jr.: The Anglo-Saxon Poems in Bright's Anglo-Saxon Reader Done in a Normalized Orthography, Harvard, 1965

- F. Mossé: Manuel de l'anglais du Moyen Age des origines au XIV siècle, I Vieil-anglais, Aubier, 1950
- Sweet's Anglo-Saxon Reader in Prose and Verse revised throughout by C. T. Onions, Oxford, 1954
- Sweet's Anglo-Saxon Reader in Prose and Verse revised throughout by D. Whitelock, Oxford, 1967
- A. J. Wyatt: An Anglo-Saxon Reader, Cambridge UP, 1948  
(翻訳)
- M. Alexander: The Earliest English Poems, Penguin Books Ltd., 1969
- R.E. Diamond: Old English: Grammar and Reader, Wayne State UP, 1970
- R. K. Gordon: Anglo-Saxon Poetry, J. M. Dent & Sons Ltd., 1964
- R. Hamer: A Choice of Anglo-Saxon Verse, Faber & Faber, 1970
- C. W. Kennedy: An Anthology of Old English Poetry, Oxford (N. Y.), 1960
- J. D. Spaeth: Old English Poetry, Gordian Press, 1967
- B. J. Whiting, et al.: The College Survey of English Literature 1, Harcourt, Brace & Co., 1942  
(文学・歴史関係)
- 英米文学史講座 第1巻 中世 600—1500, 研究社, 1962
- G. K. Anderson: The Literature of the Anglo-Saxons, Princeton UP, 1966
- G. K. Anderson: Old and Middle English Literature, Collier Books, 1962
- S. B. Greenfield: A Critical History of Old English Literature, New York UP, 1965
- W. P. Ker: Epic and Romance, Dover Publications, Inc., 1957
- K. Malone & A. Baugh: A Literary History of England I The Middle Ages, Routledge & Kegan Paul, 1967
- G. Sampson: The Concise Cambridge History of English Literature, Cambridge UP, 1965
- F. M. Stenton: Anglo-Saxon England, Oxford, 1971
- E. E. Wardale: Chapters on Old English Literature, Routledge & Kegan Paul, 1965
- D. Wilson: The Anglo-Saxons, Penguin Books Ltd., 1971
- C. L. Wrenn: A Study of Old English Literature, G. G. Harrap & Co., 1967